炉辺閑話

※順不同

岩渕伊織（岩渕洋一）…… 21
小田隆晴…… 21
和泉　徹…… 22
大貫啓三…… 22
佐藤舜也…… 23
星　榮一…… 23
星山真理…… 24
藤森勝也…… 24
品田章二…… 25
佐々木良文…… 25
富樫賢一…… 26
伊藤　聡…… 26
横森忠紘…… 27
吉嶺文俊…… 27
福本一朗…… 28
津端聖美…… 28
永井明彦…… 29
山本光宏…… 29

ご執筆いただきありがとうございました。

あるがまま

岩渕伊織

秋惜しむ小さき流木波に投げ
また戻りつく流木や秋愁ひ
飛び跳ねて転げまわつて落葉かな
病む人の言葉の端の日短か
よそとせは長く短し六花の忌
寒暁と言ふ美しき時流れ
悠久の流れの刻の杉落葉
あるがまま枯れあるがまま枯れ尽きし
来世あるごとく逡巡なく枯れし
仏像の我を見つむる寒さかな
赤き柱黒き柱や寒御堂
心経や蝋燭寒の灯を揺らし

（三条市医師会）

熊の害は有事

小田隆晴

佐渡には狸やてんなどの小動物はいるが、熊、猪や鹿などの大型の動物はいない。内地では熊が山里だけでなく、市街地の中央まで出没し、災害級の被害をもたらしている。専門家は熊の生態には謎が多く、熊の数が増えてはいるが、熊の行動変容に変化が生じたのが原因ではないかと分析している。今年はブナの凶作も相まって、民家近くの熊の出没が例年の数倍となっている。民家の近くには柿、栗、果物や花などの熊の大好物が多い。また、民家には米や穀物が保存されている。熊は学習能力があり記憶力も良い。元々は山奥で少量の食べ物をあさり、なるべくエネルギーを使わないでおとなしくしている動物であったが、民家がワンダーランドであると学習をしたためであろう。

熊はヒトの顔面を狙うので、助かっても失明が多いと言う。最近は民家のみでなく、保育所、学校や公園まで顔を出し、子供たちは戸外で遊べずコロナ禍の時の様に家に籠りうつ状態になっている。また、山奥の名湯のある観光地周辺でも熊の出没があるため、観光客の減少が見られている。

熊対策としては、山里の柿、栗の木の積極的伐採、電気マットの使用、罠の使用や擬似オオカミの設置などが試みられているが、あまり有効ではない。最終的には銃による駆除であるが、ハンターの高齢化で減少が進み、現在は自衛隊や警察OBに狩猟免許取得を要請している段階である。今、台湾有事問題や防衛費増で高市政権は騒いでいるが、起こっていない戦争の心配よりも現在の国民の生活と命を守ることの方が大事である。熊被害の方が明らかに有事である。是非とも国の援助で早急に熊対策に高い専門性を有するスペシャリストの職員を増やすようにして、熊が山の中でゆったりと過ごせるような共存の世界を作っていただきたい。

（佐渡医師会）

黄葉と紅葉

和泉　徹

1983年10月、私は西ドイツ・ローテンブルクの城砦公園を散策していた。空は澄み渡り、遠くにはモノトーンの黄葉の森が広がっている。眼下にはマイン川の支流であるタウバー川が蛇行していた。下宿先のマルクス塔近くから、市庁舎通りとヘルン（騎士）街路を抜けて10分ほどの道のりである。

城砦は堅牢で、崖は急峻、川底は深い。水量は多くはない。1945年３月、ナチス軍はこの古城に立て籠もり、最後の戦いに臨んだ。17世紀の宝箱、このローテンブルクでの徹底抗戦がヒトラーの命令であった。しかし、アメリカ軍はそれに応じず、本格的な攻撃を避けて通り過ぎた。米国国防省ジョン・ジェイ・マックロイの賢明な判断による。13世紀からの遺産はこうして守られた。この中世の街で私のドイツ留学は始まった。

ドイツの秋は短い。ほんの二週間ほどで終わる。当時の私はそれすら知らなかった。喧騒の日々から解放され、自由を満喫していた。フンボルト財団との約定により、ドイツ文化会館での四ヶ月間の研修に入った。今思えば、語学以上にドイツを学び、ロイヤリティを育んだ。ドイツ外交の賢さである。私のシンパシーは今も揺らがない。

10名余りの小さなクラスで、世界中のヒト達との親交を深めた。とりわけ日本からの留学者である。デュッセルドルフのビジネスマンや芸術を究める若き巧みとも出会った。この一期一会が、ドイツ滞在を経て今日まで続くとは、当時の私は思いもしなかった。

今年の秋、妻を伴い昔の５人組が箱根に集った。さすがに現役は稀だが、それぞれが一言居士である。車座になっての話題は尽きない。面白いことに、彼らの共通の関心事は「黄葉」と「紅葉」にあった。ドイツと日本の“こうよう”は違う。翌日、ロープウェイの下に広がる紅葉の大パノラマに誰もが感嘆の音を上げた。

（新潟市医師会）

転ばぬ先の杖

大貫啓三

私は４人兄弟の末っ子で、丁度上の姉と19歳も年が離れた、以前言われたいわゆる恥かきっ子です。母が45歳の時の子供で、小学４年生までは病弱で、年間の３分の１は、学校を休んでいました（母が、風邪を引くと大事を取って直ぐ休ませていたのかも知れません）。休んでいる間は、母からたくさんの昔話を聞いたのですが、覚えているものは数編しかありません。昔話の他、いろんな格言も教えてくれました。その中で最も今役に立ち実践しているのが、「転ばぬ先の杖」と言う教えです。用心に越したことはないと言う教えですが、具体的には私の場合、風邪を引いたかなと思ったときに、できるだけ早めに、総合感冒薬のペレックスと葛根湯を一袋ずつ服用するのです。すると、本格的な風邪は引かずに済んでしまうのです。また、ちょっとした擦り傷でも、リンデロンVG軟膏を塗ります。これですぐ直ります。

この様な考えには、体に備えられた自己修復力（免疫力）があるから、「転ばぬ先の杖」はつかなくても良い、つくのは良くない、と言う考え方があるのは、医学を学んだものとして理解できます。妻もそう言って私のことを冷ややかな目で見ています。でも、本当にこの杖はあるのです。

この格言はちょっとしたことには通用するのですが、杖本来の用途となると少し違います。私も八十路を迎え足腰の衰えは常に感じています。本当の杖、「転ばぬ先の杖」は、早めに使うのが今の論調からすれば当然なのですが、必要としないからか実践は出来ていないのが現状です。杖を使わなくとも済むように、スクワットの真似事をしたり、出来るだけ歩くように、ささやかな抵抗をしているのです。「転ばぬ先の杖」、みなさんどう思われますか？

（長岡市医師会）

極楽の蓮の池の畔で

佐　藤　舜　也

極楽の蓮の池の畔でとは蒲原浄光寺老院であった故蒲原宏先生が言ったことではない。蒲原先生は生前死後の話をすることはなかった。何しろ百歳をすぎてまだすることが５年分残っていた蒲原先生は、とても死後のことなど語る暇はなかったのであろう。ただ最後の便りには、生きているものは最終的に元素に還ると書いてあった。理屈ではその通りだが、心情的にはついていけない感覚だと思った。

極楽の蓮の池の話は昔旧吉田町で開業していた涌井孝敏先生（私と同期の涌井智一郎外科医の父上）の言った事である。県立吉田病院にいた頃、涌井医院に通っている人も多く、老先生は耳が遠くなったようだと話す人がいた頃である。

あるお婆さんから、涌井老先生が「極楽の蓮の池の畔で待っているから、急がずゆっくり来い」と言われたとの話を聞いた。あの世にいってまで診てくれるとは有難い話だと言ったような気がする。それから間もなく涌井先生が亡くなられたとの話を聞いた。そういえばあの話をしたお婆さんも姿を見ないので、聞いてみたら亡くなったとのことであった。外来の皆で涌井先生が連れていったのだと噂したことがある。

極楽の蓮の花の池の畔はあの世の理想郷と言えるだろう。出来るものであれば、その場で父母や早く逝った弟妹達に遇いたいものだが、こればかりは難しそうな気がする。下肢の切断手術をする毎にあの世に行ったら閻魔大王から「多くの脚をもいだので、蓮の花の池行きは差し止め」と言われそうだ。死後すべて元素に還るのは確かだが、蓮の花の池の畔の散策の方が受け入れ易い感覚だと思っている。

（新潟市医師会）

最近、残念だった事二つ

星　　榮　一

最近残念に思った事が二つあります。

１.三宅正一の胸像が雲隠れ

三宅正一は長岡中央綜合病院はじめ、県内の厚生連病院の生みの親です。彼の胸像は、長岡市悠久山公園の松山の頂上に、昭和57年に社会党有志の寄付により建立されました（写真１）。久しぶりに昨年秋に松山頂上に行ったら、胸像のあった場所は、更地になっており、胸像は見当たりませんでした。何らかの事情により撤去され、どこかの倉庫に保管されていると思いますが、一日も早く何処か然るべき場所に建立されることを願っています。

２．旧津上製作所社長住宅の取り壊し

旧津上製作所社長住宅は、津上退助社長が自ら設計して、昭和16年に工場敷地内の国道８号線側に建設された。山小屋風の風情のある耐雪木造建築物で、社長住宅兼迎賓館として使用されていた（写真２）。昭和50年代に、至誠会理事長の荒川修二氏が建物を譲り受け、長岡市川崎１丁目に移築した。初期には職員研修所として使用していたが、最近は空き家状態が続いていた。

この建物は是非保存すべき建物で、市民に開放し、種々のイベントや結婚式などに利用できないかと密かに考えていた。

ところが、本年春に建物の近くを通ったら、建物はなく、更地になっていた。心から残念に思う次第です。

（長岡市医師会）

写真１　三宅正一胸像

写真２　津上製作所社長住宅

シニアピアノ＆旅

星　山　真　理

終活で空いたクロークにアップライトピアノを置き、15歳で中断したピアノレッスンを60年ぶりに再開した。ジョン・レノンの「イマジン」が彼の最後の曲であることを新聞で知り、楽譜を取り寄せた。譜面を読むことは本を読むことと同じという話に納得。山形から来柏し、食事中の妹一家のために､静かに弾いてやる。触発されたらしく、その後白衣などがほん投げられ、埃だらけだった気の毒な古いグランドピアノを調律してやったらしい。

旅先のホテルにはグランドピアノが置かれていることが多い。著名人が弾いたというピアノはロープが張られ、眺めるだけである。血統付きでないグランドピアノは隅の方で放置されている。一つお願いしたいことがある。宿泊客のために、ピアノに限らないが楽器練習室を一部屋設けてはいただけないだろうか。スペースや経費の問題より、客からの要望がなかっただけだろう。そして「練習室あります」という案内があればありがたい。

この年になると、すべてにおいて人様が考えたお仕着せに従う時間がもったいない。旅行のプランも型通りの観光コースを巡るよりも、非日常的な場所で好きなことを家にいるみたいにして自由に過ごしたい。高齢者には過剰な量の料理も再考の余地があろう。

柏崎市の文化会館アルフォーレでは、１時間２千円でスタインウエイやヤマハの最高級ピアノを大舞台で弾かせてくれる。予約は早い者勝ちである。何回か利用したが、気分はプロ。柔らかなタッチと音は極上で、市民にも開放してくださった企画者のＭ氏に感謝したい。

子供時代、ピアノレッスンをさぼり、楽譜とともに家から追い出され、暗い柏崎神社の境内を抜け、先生の家へ。「叱られたな」と、上級生より先にレッスンして下さった。先生の面影と言葉はいまだに覚えている。

（柏崎市刈羽郡医師会）

第４回日本地域医療学会を終えて

藤　森　勝　也

2025年10月11日（土）・12日（日）の両日、新潟市・朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターにて「第４回日本地域医療学会 学術集会」を開催いたしました。

メインテーマは「地域に学び、地域に活かし、みんなで育み紡ぐ、未来希望の地域医療」、サブテーマは「東西両医学の調和と患者中心の医療」とし、地域医療の未来を見据えた多角的な議論が展開されました。

会期中はまずまずの天候に恵まれ、全国より605名の参加者をお迎えすることができました。研修医・大学生・高校生を含む若手約110名が参加し、会場は終始活気に満ちておりました。

開会式では、中村洋心 新潟県福祉保健部長、堂前洋一郎 新潟県医師会長、佐々木亮 新発田北蒲原医師会長、塚田芳久 JA 新潟厚生連代表理事理事長より、温かいご祝辞を賜りました。

１日目の夜には、ホテル日航新潟にて交流会を開催いたしました。ピアニストによる BGM 演奏に加え、佐渡の民謡「佐渡おけさ」、アルビレックスチアリーダーズによるチアダンス、新潟市の郷土芸能「万代太鼓」が披露されました。また、新潟ならではの郷土料理と、県内89の酒蔵より厳選した44本の銘酒を用意し、会場は終始にぎやかで温かい雰囲気に包まれました。

ご講演・座長をお務めいただいた菊地利明 新潟大学病院長をはじめ、山本卓教授、上村顕也教授、岡崎史子教授、井口清太郎教授、布施克也先生、小林大介先生、吉澤弘久先生、吉嶺文俊先生、佐藤賢治先生、篭島充先生、関慶一先生、杉谷想一先生、矢部正浩先生、榎本克己先生、犬飼賢也先生、後藤慧先生、今西明先生、齋藤悠先生、木島朋子先生、前田一樹先生（順不同）の皆さまには、多大なるご協力を賜りました。加えて、多くの県内医師会の先生方のご支援・ご尽力により、本学会を盛会裡に終えることができました。ここに心より御礼申し上げます。

（新発田北蒲原医師会）

テレビの音と電話機の声

品　田　章　二

補聴器を購入し着用してから５年が経過した。耳の経年変化に気づかなかったが、半年前から特に進行したらしい。昨年末、テレビを２メートル離れて見る時、音量を18に上げてから補聴器を耳に入れていた。テレビから離れた場所で音情報を得たい時は、更に肩掛け集音器を使う。

テレビでは主に、朝は地上波のニュースや天気予報、昼は録画済みの番組、夕方と夜はそれらに衛星放送を加えた様々な番組を視聴している。衛星放送のワールドニュースは、同時通訳の情報が筆者には早口過ぎて理解が追いつかない。肩掛け集音器を使用しても理解できない時は目を瞑って聴覚に神経を集中する。入浴時に補聴器を外して充電するため、夜のテレビ鑑賞、特に録画済みのピアノ演奏や歌のライブを楽しむ時、集音器だけ着ける。補聴器も集音器も着けない場合、テレビの前１メートルに身体を運び、音量は最大40に上げる。

高齢者向けの商品のテレビショッピングは固定電話で注文するが、補聴器を着用していても相手の声が遠く感じられ、筆者の声も大きくなってしまうことがあった。受話器用の拡声器を注文して設置したところ、相手の声がはっきり聞きとれるようになった。しかし、ある電話の会話の際に、相手の言葉の「C」と「D」を聞き分けることができなかった。拡声器の効果にも限界があり、誤聴を完全には修正できないようである。

昨年11月に医療機関を辞めて自宅会員になった。テレビの音量が大きい環境の中では、生活者の声も自ずと大きくなろう。外来客は怒られたと感じるかもしれない。大きな声が原因で「カスハラ」などと言われては困る。テレビの音量は上げ過ぎないように生活したいと考えている。

（新潟市医師会）

等　脚　台　形

佐々木　良　文

高校２年のテストに、正四面体をどのような平面で切れば等脚台形になるか、という問題が出された。先生の答えは二辺に平行な平面であった。私の答案は一辺に平行で四辺と交わる平面だったが誤りとされた。先生に等脚台形になります、と言ったが、二辺に平行でなければだめさと言われた。一週間後の授業で、私の答案も正しいと先生は言われたがそれ以上の説明はなかった。その後これを話題にしたことはない。

診療所の食事会で、この世に言い残したことはないかと聞かれこれを話した。他に16年間続いた自分の皮膚炎の原因が合成洗剤の酵素であることに気づき、酵素のない石鹸「そよ風」に変えて軽快、約30人の皮膚炎が「そよ風」で軽快したことを話した。

近年の人間ドックでCEA検査が無くなった。CEAの値には個人差があり、CEAの無い人も少数いるので、１回の検査に意味は無いが変化には意味があると考え、胃カメラの時はCEAを検査している。膵がん８例中７例がCEAの上昇により発見された。他に良い方法を思いつかない。

食べながらフンと言って私の話を聞いていた職員が、薬局に「そよ風」を置くよう頼んでくれていた。もう言い残したことは無い。安らかに眠れる。二辺に平行な平面で切れば長方形か正方形になる。

（佐渡医師会）

ネズミとライオン

富　樫　賢　一

「俺はこのうちに生まれて来て良かったと思う」と次男がボソッと言った。大晦日に、夫婦と息子３人でスキヤキを食べている時だった。誰に向かって言ったかは分からない。が、他の息子２人も否定しなかった。私と女房ははからずも目があったが、お互い何も言わなかった。

どんな両親のもとに生まれて来るか、子供に選択の余地はない。両親から受け継いだ遺伝子と両親が作り上げた家庭環境から逃れることもできない。

イギリスの理論物理学者ホーキングは『人生は決して公平ではないと悟り、そしてあなたの今の状況でなしうる最善を尽くしなさい』と言った。当たり前のことのようだが、21歳でALSを発症しながら、76歳まで精力的に研究を続けた博士の言葉だけに重い。

健診業務を始めて７年、色々な人と出会った。難病、パニック障害、うつ病、聾唖などハンディーをかかえる人達とも多数出会ってきた。が、その境遇を嘆くような人には一人も出会わなかった。そして、彼らが彼らなりに元気に働いていることに驚きもした。

生まれ変わったら、ライオンになりたいと思う人はいるかもしれない。が、ネズミになりたいと思う人はいないだろう。イソップ童話には、馬鹿にされたネズミが馬鹿にしたライオンを罠から救い出す話がある。自分を捕獲しながら食べないで逃がしてくれたことへの恩返しだ。

だからといって、恩を忘れなかったネズミが偉い訳ではない。ネズミはネズミ、どうあがいてもその境遇から逃れられることはできない。ネズミはネズミなりに、ライオンはライオンなりに生きているだけ。

３人の息子達は、すべて親元を離れ、自分なりの人生を歩んでいる。皆が揃うのは年末年始ぐらい。各自が好き勝手を言い合いながらの会食中、時には思いがけない話が飛び出したりもする。

（長岡市医師会）

早起きは三文の徳？

伊　藤　　聡

2025年の学会で埋め込み式コンセントに躓き転倒。脳震盪、顔面挫創、左手親指基節骨骨折の重傷を負った[1)]。左手はギプス装着となり、毎朝のジョギングや夕方の水泳は中止した。その後ギプスから解放され、朝４：30からのジョギングを再開した。海岸に以前地域猫がいた小屋があるが、猫が高齢化し、猫好きの住民が自宅に引き取り、その様子を写真に撮り、時折更新してくれている。写真を見ようと走っていくと、見慣れぬ乗用車を発見。不思議に思ったが、写真を見て振り向くと首つり死体がぶら下がっていた。これには驚愕し大声を上げた。携帯電話を持たずに走っているので、帰宅し警察に電話をしようと走っているとジョギング中の若者とすれ違った。聞くと携帯を持っているとのことだったので、「首つり死体があったので警察に通報しましょう」と頼むと「いやです」。事件に巻き込まれたくないらしい。必死に家まで走り通報。「私は医師であるが、死亡は間違いなく、蘇生はしなかった」と報告し、現場の位置を伝えた。消防署から確認の電話が入ったが現場に来いという指示はなかった。犯人は現場に戻る、ではないが、翌日現場に行ったところきれいに片付いていた。首つり死体発見は２回目である。今から20年近く前、つくば市の公園をジョギング中に首つり死体を発見した。ある人は「伊藤先生は他人の３倍動いているから３倍の事を経験しますね」。またある人は「80億人間がいますが、首つり死体２度遭遇は伊藤先生だけでは？」。そしてある人は「２度あることは３度ある」とも…。毎朝首つり死体がないか戦々恐々とジョギングをしている。その後現場の近くでイノシシを発見、また警察に通報した。

（新発田北蒲原医師会）

１）伊藤　聡：学会、研究会では埋め込み式コンセントの使用を禁止しましょう．新潟県医師会報 2025; 904: 18-19.

羆を撃つ

横森忠紘

近年、熊による人身被害が続発している。ついに民間では対応できないと、秋田県知事が自衛隊の派遣を要請するに至った。日本軍隊（？）総帥の初仕事が熊退治かと、小泉防衛相の戸惑った顔が印象的だった。内地には月の輪熊が多く植物性のものを主食にするが、主に北海道に生息する羆（ひぐま）は草食と同時に肉食でもある。時には人間を食い殺す。羆は月の輪熊とは比較にならないほど体が大きく、500キロを超すものもざらにある。

明治以降、北海道の開拓は熊（とくに羆）との戦いでもあった。そして日本獣害史上最大の惨事として知られているのが、1915年（大正４年）12月に北海道北西部の苫前村三毛別六線沢（現在の苫前町三渓）で羆が開拓民を襲った三毛別羆事件である。事件は、冬眠に失敗して餓えた凶暴の羆が開拓部落の家を襲ったことから始まる。最初の家では、子供と妊婦の２人が惨殺された。妊婦は山に持ち去られ、大半が食された屍体として発見された。翌日更に４人が食い殺され、部落はパニックとなった。要請を受けた警察が動いて討伐隊が組織され現地に集結し、更に陸軍歩兵連隊将兵も出動した。総勢600人の討伐隊は当初意気軒昂たるものがあったが、体重500kg余の羆に直面すると怖気づき雪崩を打って敗走して全く役に立たなかった。業を煮やした区長は、独断でプロの猟師を雇った。当年58歳の老猟師は、酒乱で気難しく皆から疎外されていたが腕は確かであった。単身羆を追跡し20m の至近距離まで接近して一発で心臓に命中させた。彼の猟銃は連発の利かない旧式単発銃であった。銃撃直後の老猟師の顔は、血の気の失せた死者のように真っ白であったと身を潜めて目撃していた区長が証言している。

作家吉村昭は、数年間かけて現地に赴き取材してドキュメンタリー長編「羆嵐」を書きあげた。その稀有な題材とリアルな描写によって、日本ノンフィクション作品の白眉と言われている。

（小千谷市魚沼市医師会）

マイナ保険証

吉嶺文俊

令和７年９月における当院のマイナ保険証の利用人数の割合（レセプト件数ベース利用率）が75％を超えた（ちなみに全国平均値は44％）。総勢５名の管理会議メンバー一同大喜び。医療 DX 推進体制整備加算１の算定要件を優に超えているのだから。しかしここに至るまでの苦労は半端ない。事務長と看護部長と推進リーダーである医事企画員は毎朝、雨の日も雪の日も、来院してきた患者さんに「マイナンバーカードを持ってきましたか」と地道に声がけを続けてきた。

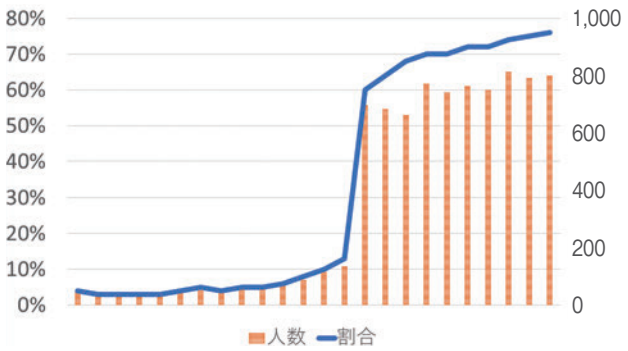
厚労省資料によると、令和７年９月時点におけるマイナ保険証の利用実績はまだ37% とのこと。先日厚労省のある方に褒められてちょっと嬉しかった。

マイナ保険証の便利なところはなんといっても薬歴閲覧。ポリファーマシーの発見がとても楽になった。紙媒体のお薬手帳も重宝しているが、さすがに２年間のデータをさらっと電子カルテにコピペできる利便性にはかなわない。

マイナ保険証はこれからの日本に絶対に必要だが、良い意味でも悪い意味でも、患者さんは医者に嘘をつけなくなってしまうだろう。例えば自分が逆に患者さんの立場でかかりつけ医にだまってこっそりセカンドオピニオンを受けるとしたら「カードを忘れてきた」といって提示しないかもしれない（そんなことしませんよ！）。

デジタル推進がなかなかすすまない背景として、ひとりひとりの意識変革の難しさだけでなく、人間関係というアナログな状況が背景にあるのだろう。

（十日町市中魚沼郡医師会）



兵馬俑の謎

福本一朗

古都**長安**の面影を残す念願の西安を訪問し、**兵馬俑**を見学してきました。兵馬俑は秦の**始皇帝（B.C.259～210）**がその陵墓を守るために東西200メートル以上、南北60メートル以上に及ぶ坑に約8,000体の兵士の俑（テラコッタ像）を東方に向けて埋めたもので、1974年臨潼県西揚村の農民によって発見されました。指揮官・騎兵・歩兵など異なる階級や役割を反映させた造形は、始皇帝麾下の軍団を写したもので、軍人だけでなく文官や宮殿のレプリカ、動物飼育員、力士や楽人達の俑、それに始皇帝が諸国巡航に用いた四頭立ての**轀輬車**も発掘されていて、現生の臣下全員を来世に伴って行くために建造したとされています。

かつては、兵士の俑全員の顔と衣服に美しい彩色がされていて、どれ一つとして同じ顔をしたものはありませんでした。特に驚くべきはその写実性で、兵士一人一人の細やかな顔の感情とともに毛髪、髭、黒子までも精密に描写されていることは、現代の3Dプリンタにも劣りません。そして不思議なことにこの神業ともいえる写実芸術は、中国三千年の歴史の中でも**始皇帝治世のたった30年間**にのみ存在しており、その前にも後にも一切存在していないのです。この中国離れした精密陶器彫刻は誰が作り、そしてなぜ中国で廃れてしまったのでしょうか？

兵馬俑を最初に見た時、その超絶写実性から古代ギリシャの彫刻群を思いだしました。芸術家が尊敬されていた古代アテネでは、既に紀元前6世紀から極めて写実性の高い着色テラコッタ像が作られており、そのギリシャ芸術を引き継いだ古代ローマ帝国は中国とシルクロードを介して密接な交流がありました。もしかしたら兵馬俑は始皇帝が西域から連れてきたギリシャ系芸術集団によって作られ、秦帝国滅亡後に保護者を失った彼等はギリシャに帰って行ったか、あるいは中国民族の大海に飲み込まれてしまったため、兵馬俑の写実芸術が中国に残らなかったのかも知れません。古代のロマンの一つです。

（長岡市医師会）

本誌投稿“体験談”

津端聖美

「先生も投稿してみたら」、本誌の常連だった同期のHさんが言う。この頃興味があった“クラリスロマイシン少量長期投与療法”、その歯周炎への応用を書いてみた。曽田恒先生から電話があり、平成11年1月号の炉辺閑話に掲載するとのこと。自分の文章が、活字になった。平成13年1月号への「薬」。症状ごとに薬を加える足し算の処方を戒める内容。思いがけず日医ニュース平成13年8月20日号の“南から北へ”欄に転載され、他県の同期生から葉書を貰った。平成16年7月13日の三条水害、開業以来最大の危機だったがなんとか乗り切り投稿できた。当時総理の靖国参拝を巡って、A新聞が非難しY新聞もA級戦犯分詞だの国立追悼施設だの馬鹿なことを論じていた。平成17年1月号に「復習靖国」が載った。靖国神社の本質、不当な東京裁判、国会決議で戦犯なるものは既に消滅、全国規模で行われた戦没者の靖国合祀活動、A新聞が火をつけ中韓が政治外交カードとして抗議し始めたこと等をまとめた。程無く、黒木尚義先生から共感と激励の葉書を頂いた。次いで拉致問題や国連の欺瞞や無用な裁判員制度や国家と憲法やインフルエンザワクチン批判他、日頃の思いを様々に発し自由だった。福島第一原発事故後に反原発や放射能被害を殊更言う文章が続き、これと反対の私の投稿文はしばし不掲載。新型コロナではマスクやPCR検査や2類指定継続等に疑問を呈し、不掲載が多かった。ウクライナ紛争に対しては、世界の流れと今後の日本に絡め存分に書かせて貰った（コロナとウクライナ関連で、掲載後寺田治男先生からのお便りに意を強くした）。令和6年白秋夜話の掲載文は、日本の偏向報道。続きを、令和7年の炉辺閑話と緑陰随筆に投稿したがボツ。ボツについて、広報委員会に問い質す形で白秋夜話に投稿してみたがボツ。投稿規定の適用を、厳格化したらしい。御苦労なことだと思う。

（三条市医師会）

ポスト・トゥルースと無知学

永　井　明　彦

医療の分野でもDXやAIの活用が進んでいるが、デジタル万能の現代ではSNSが跋扈し、事実かどうかよりも自身の興味や感情や政治的信念が優先される認知バイアスの所為で冷静な判断力を失うことが増えたように思う。また、2016年の英国のBrexitや米国の大統領選を契機に根も葉もない陰謀論やフェイクニュースが拡散され、ポスト・トゥルースpost truthが流行語になり、何が真実か判らなくなって世界はデジタル＆フェイクファシズムに翻弄されている。

無知学agnotologyという学問分野がある。「知らないこと」のメカニズムを分析し、知と無知の在り方を問う学問で1992年に米国のロバート・N・プロクターによって提唱された。無知には単なる「知識の欠如」だけでなく、社会や権力が「意図的に作り出す無知」があるという。喫煙による健康リスクの隠蔽過程や石油会社と利益相反する学者の気候変動否定論などが該当する。また、歴史的に女性や非白人の研究業績が評価されず、主流の科学史から消された事例、例えばロザリンド・フランクリンのDNA構造研究なども含まれる。

インターネット上のSNSは、アテンションエコノミーを通じて多くの利益団体に都合のよい無知が拡がるのを助けている。ポスト・トゥルースや陰謀論に対抗するためには、無知学を土台にメディアや情報に対するリテラシーを高め、ファクトチェックを欠かさない努力が必要であろう。

かつてF・ベーコンは「知は力なり」と宣言し、M・de・モンテーニュは「私は何を知っているのか」と問うたが、G・オーウェルが1949年に著わしたディストピアSF小説の『1984』では「無知は力なり」というスローガンが登場した。「私達に知識ではなく、無知を植え付けるために情報が生産され、拡散され、操作されている。無知が世界を回している」という著者の述懐は、正に無知学の先取りであり、先見の明ありと言わざるを得ない。

（新潟市医師会）

ヒッチレースを読んで思い出した夏

山　本　光　宏

京都大学吉田寮の寮祭名物企画「ヒッチレース」の記事を読み、ヒッチハイクをしていた学生時代の記憶がよみがえりました。目隠しをされて見知らぬ土地に降ろされ、そこからヒッチハイクで寮への帰還を目指す――今の大学生も、なかなか馬鹿なことを本気でやっている。そう感じると同時に、「若さと馬鹿さは紙一重だな」と、どこか懐かしい気持ちになりました。もっとも、その言葉は、まず自分自身に向けるべきものです。

実は私自身、45年前、56日かけてヒッチハイクで日本一周をしました。所持金は6万円。スケッチブックと寝袋だけを持ち、道路脇で親指を立て続けました。乗せてくれた車はおよそ600台。地元の方に食事をごちそうになり、漁港では作業を終えた方に声をかけられ、倉庫の片隅に寝袋を敷かせてもらったこともありました。

寝床は毎日違いました。無人駅のベンチ、地方大学の学生寮、公園の片隅。海水浴場では更衣室を借りて一夜を過ごしたこともあります。今なら眉をひそめられるかもしれませんが、当時はどこか大らかな時代でした。予定もゴールも決めていなかったのに、不思議と怖さは感じませんでした。若さと馬鹿さの勢いが、不安を押し流していたのだと思います。

あれから月日が流れ、私は開業医になりました。今では、親指を立てる場面といえば、せいぜいタクシーを止めるときくらいになりました。リスクを避け、効率を重んじる日々の中で、あの頃の無茶は遠い過去になりました。

それでも、吉田寮のヒッチレースの記事を読んで、心の奥に残っていた風の匂いが少しだけ戻ってきました。若さは時に馬鹿さを伴う。けれど、その馬鹿さが人を信じる力になり、人生のどこかで支えになることもある。そう思える年齢になったのだと感じています。

（新潟市医師会）